

「大倉陶園と大倉孫兵衛」

株式会社大倉陶園は、「良さが上にも良きものを」という大倉孫兵衛・和親父子の理念のもと大正 8 年（1919 年）に創立された日本の洋食器メーカーです。1460 度もの高温で白色の硬質磁器を生産し、手描き絵付、岡染め、蒔絵付等の特徴ある技法を長く伝えてきています。

日本における洋食器製造の歴史には、幾人かの欠くことのできない人物がいます。例えばゴッドフリード・ワグネル。明治元年（1868 年）に来日して明治 25 年（1892 年）に東京で没するまで、東京職工学校（現東工大）で教鞭をとったほか日本各地で多大な影響を与えました。また、河原徳立。明治政府の命を受け、ウィーン万博出品物を製造するべく博覧会事務局附属磁器製造所を建設。後にこの窯を払い受け、瓢池園を設立し、日本の洋食器製造において芸術性を高めることを追及しました。そして森村市左衛門と大倉孫兵衛・和親父子。森村組を作り、現森村グループ、現ノリタケカンパニーリミテッドへと発展させています。大倉陶園はこの 3 つの流れをすべて受け継いでいる窯です。その創設者大倉孫兵衛は、森村組との関わり以外にも、ジャポニスムに影響を与える仕事をしています。

大倉孫兵衛は、天保 14 年に江戸四谷伝馬町で絵草紙店萬屋（よろずや）を営んでいた大倉孫四郎（百木家より入婿）の二男として生まれ、兄が継いだ絵草紙店を手伝う傍ら開港期の横浜で外国人相手に錦絵を売り始めます。そこで森村市左衛門と出会い、その妹との結婚を機に独立、神田に同じ屋号の萬屋を開きます。その後萬屋・大倉孫兵衛は明治 8 年に大倉書店と改名し、三代目広重の『大日本物産図絵』（明治 10 年）、幸野楳嶺の『楳嶺百鳥画譜』（明治 14 年）・『工業図式』（明治 15 年）・『楳嶺花鳥画譜』（明治 16 年）、渡辺省亭・画の『省亭花鳥画譜』（明治 23 年）を出版し、一部は海外に輸出されました。『楳嶺百鳥画譜』はセルヴィス・ランベールの下図にもなっています。明治 38 年には大倉書店より夏目漱石の『我輩は猫である』が出版されました。ちなみに、大倉書店はその名の一部を現在の大修館書店の名に残しています（頭文字「大」の字）。

また、大倉孫兵衛は書籍に使う洋紙に注目して大倉孫兵衛紙店を作り、同店は明治 22 年に大倉孫兵衛洋紙店、大正 7 年に株式会社大倉洋紙店と改名しています。これを任されたのが養子大倉文二であり、その婿養子大倉邦彦です。二人ともその経営手腕を高く評価されています。邦彦は昭和 7 年に東急東横線「大倉山駅」の由来ともなった「大倉精神文化研究所」を設立していますが、この本館が現在の大倉山記念館です。

そして、大倉孫兵衛がその晩年に「全く大倉の道楽として此上なき美術品を作り度し」として大正 8 年（1919 年）に東京蒲田の地に誕生させたのが、「美術陶器工場」大倉陶園でした。残念ながら孫兵衛は大正 10 年（1921 年）初窯火入れの時に同じくして逝去し、製品を見ることが叶いませんでしたが、志は共に働いてきた和親が守り、また、日野厚が初代支配人として任ぜられました。日野は、明治 44 年 3 月に東京工業学校（現東工大）付設工業教員養成所工業図案科を卒業し、明治 44 年から大正 5 年まで愛知県立瀬戸陶器学校（旧瀬戸陶器学校。初代校長が北村弥一郎、三代校長が黒田政憲。共にワグネルに学ぶ）で図案を教え、大正 3 年に「瀬戸図案研究会」を中心となり発足させた人物です。

当時の蒲田工場は、その工場棟等を囲む敷地は「花園でチューリップ、ヒヤシンス等四季の花が絶えることがなく、孫兵衛翁の『花壇もつくり、工場からして美術の工合につくりたきこと』との言をその

まゝに現わし、静寂で美しく、美術的価値の高い工芸品を造るにふさわしい環境につゝまれ」(『大倉和親翁』昭和34年) 이었습니다。

大倉陶園は、第二次世界大戦最中の昭和18年に、昭和天皇第一皇女照宮内親王のご婚儀に際し、ルリ菱菊エンボスディナーセットを上納します。そして、昭和20年4月の空襲で工場を全焼、翌年再建、昭和35年に東京都大田区より学校用地として使用懇望されたのを受け、現在の横浜市戸塚区の工場に移転し、現在も使い続けられているケラー式トンネル窯に火が入りました。今も大倉陶園職員の手により園内には常に花が咲き、絶えることはありません。

なお、河原徳立の三男百木三郎は森村組の重鎮ですが、孫兵衛の三女および四女と結婚し、同じ森村グループの東洋陶器株式会社(現TOTO株式会社)の二代社長となっています(初代社長は大倉和親)。その長男であった故・百木春夫氏は、昭和53年より大倉陶園の社長となり、昭和・平成のデザインや経営を広く深く指揮されました。

大倉陶園は、マイセン、セーブル、ジノリ等と同じ磁器製造技術以外にも、蒔絵付や岡染めなど、大倉にしかない技法を継承しつづけています。工場見学では、磁器生地製造から焼成、絵付、また品質管理等の過程を拝見します。その工程は精密機器製造にも似ています。また、最後の展示室見学では、その集大成である多くの作品を拝見しますが、オーダーメイド品、手描き作品、またフィギュア等市中では見ることのできない製品が含まれる予定です。

(文責、本例会担当実行委員・長野千裕)